

言葉と つきあう

映画監督

西川美和

私は、失言の多い人間です。
「言って良いことと、悪いことがある」というフレーズがありますが、幼い頃から、その「言って悪いこと」のほうを、ぼろり、ぼろりとこぼしてしまいう性分で、私の母親は「あなたの言葉は、ひとを傷つける凶器になる」と、たいへん危惧していました。

しかし「書き言葉」というものを覚えてから、その不用意さ、無防備さが多少緩和されていったように思います。脳みその中で発生した電気信号をすぐ真下の口からつると喋るより、少し距離のある指先のほうから黙って綴り出すくらいが、いくぶんか「寝かされて」「配慮のある」ものが上がる感じがするのです。文字として記録されると、自分がうつかり放つ「言って悪いこと」も少しは客観性をもって眺められ、なぜ自分がそれを発するのか、発さずにはおれないのかを考えて、それを人にどう伝えるかも吟味することが出来ます。

ひとの書くものにも興味を持つようになりしました。小説などの世界では、楽しい冒険や美しい恋愛と同じくらい、人

間に内在する闇や毒もまた花形の主題です。一般的には「言って悪いこと」でも、書き手の腕次第で笑えるものにもなるし、孤立していた心に寄り添うものにもなりうるということを、強く実感しました。もしも「読む」とか「書く」という行為がなければ、私の中から発生する「言って悪いこと」は内部でぶすぶすと煙を上げ、自家中毒に陥っていたかもしれせん。次第に、私にとっては「書くこと」がイコール「考えること」になっていきました。ペンや鉛筆を持って、初めて自分が何を考えているかわかってくるんです。ちょうど中学に入った頃から始まっ

た習慣だと思います。

その頃は、どこかで読み齧った言葉をすぐに真似して使っていました。漱石を読めば「私は」が「余は」となり、太宰を読めば「こひを、しちやつたんだもの」と。そんな中学生の文章ってあります。真新しいスニーカーや、ハイブランドのバッグを中学生が身につけている感じだと思います。ちぐはぐで、いい気になっているのは本人だけ。今でこそ、そんな自分もなかなかいいじましいですが、当時は一週間もすると顔から火が出そうほど恥ずかしくなって、ぐちゃぐちゃに丸めて捨てていました。だけど、そういう背伸びをする中で、何がほんとうに自分の気に入ったスニーカーなのか、バッグなのかの取捨選択がなされていくものです。ちゃんと自分の生活の用途に合わせ、好きだと思ったものを大事に使い込んでいくと、いつのまにか珍しい言葉や古い言葉でも、そのひとのものになると思います。そして、その言葉はそのまま「そのひとらしさ」になっていきます。

使う言葉こそがその人物、と言っても良いと思います。ひとは、何を見て、ど

んな環境で育ち、誰とつき合ってきたか。そういうものが、語彙や語り口に表れます。帰国子女の人は、日本語の言葉遣いの中にもその特徴がにじみ出ます。地方出身者が使う標準語と、東京育ちの人が話す東京弁は違います。趣味の多い人、少ない人、家庭のある人、一人暮らしの人、些細でも、必ず使う言葉の中に特徴がちりばめられます。脚本を書くときには、台詞の上でキャラクターを書き分けるわけですが、一つの作品の中でも、二人として同じ言葉遣いの人間は出てきません。兄弟でも、夫婦でも、生きる場所や思考によって、言葉に差異を持たせる。そのように書くことで、脚本を渡された俳優たちは自分に与えられた役の人物のキャラクターを掴むのです。

私は、映画監督に弟子入りしましたが、コミュニケーション能力に不安もあるし、やっぱりひとり書斎で仕事のできる脚本家になろうと思った頃がありました。ひっそり日陰に居ても、脚本の中に魅力的な世界を作り、魅力的な人物を出せば、きつとお金を出す人も出て来て、力になって

くれるスタッフや、俳優も見つかると思っただけです。監督をやるようになってからも、自分の企画の魅力を話し言葉で伝えきる自信がないので、映画に関わってくれる人一人一人の心を掴むためのラブレターだと思って、脚本を書いていきます。ラブレターは、相手を落とすためのものですから、決してひとりよがりではないけません。この物語と人生を共にしたら、絶対に楽しくなる、この物語には、絶対に自分が必要だ、この物語を逃したら、絶対に後悔する——受け取った相手にそう思い込ませようと、私は台詞の一言一句、ト書きの一言一句に心血を注ぐので

西川美和
にしがみ わ

1974年広島県生まれ。早稲田大学在学中に是枝裕和監督作「ワンドフルライフ」にスタッフとして参加。2002年「蛇イチゴ」でオリジナル脚本・監督デビュー。06年公開の「ゆるる」で一躍脚光を浴び、09年公開の「ディア・ドクター」では、日本アカデミー賞最優秀脚本賞など数々の賞を受賞。著書に「きのうの神さま」(ポプラ社)、「映画にまつわるXについて」(実業之日本社)など。

写真：篠塚ようこ

す。そこに綴る言葉は、もう私自身を解放するためのものではなく、これを読む「誰か」のための言葉なのだ、と思っただけから、私は自分がプロになれた気がしました。——と、それらしい策士のようなことを書きましたが、本音を打ち明けると、その恋に恋をしているのは、やっぱり私自身にほかならないのです。自分が勝手に思いつき、しつこく温めたかなしい片思いの相手になってくれる仲間がほしくて、しゃかりきに権謀術数(けんぼうじゆすう)を巡らせ、錬金術を学び、机にかじりついているのにすぎません。

なぜ言葉があるのか。当たり前ですが、それは他者とわかり合い、交わるためです。誰ともわかり合えない閉ざされた気持ち、誰をたつたひとり帳面に書きなぐって、解放してくれるのも言葉ですが、他者に伝えたいという意志が起こったときに初めて、言葉は磨かれていきます。一人でこもって思索しているように見えて、人間はその思索の言葉の先に届かぬ他者を夢見ているのです。結局のところ、世界に他者がなければ、言葉もないということではないのでしょうか。